



Title	シエリの神祕思想の特質
Author(s)	本堂, 正夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 5, 143-165
Issue Date	1956-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33234
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_P143-165.pdf



シエリの神祕思想の特質

本
堂
正
夫

シエリの神祕思想の特質

本 堂 正 夫

目 次

序

- 一、シエリの世界の抽象性
- 二、初期の詩における抽象世界、その概念的傾向
- 三、詩的感動の源泉としての自然
- 四、「プロミース・アンバウンド」に見られるシエリの特質
- (e)(d)(c)(b)(a) シエリの詩の非形体性、古代神話との相違
光と響と運動の交錯、全一への憧憬
事物の本体を包む雰囲気としての光と響
こだまの印象
空間の広さと宇宙観
- 五、自然に対するシエリの態度
- 六、抽象概念に対するシエリの態度
- 七、結 論

序

シエリ思想に見られる一つの傾向はフランス革命に負うものであることは批評家達の等しく認めるところであるが、シエリが懐いた思想には革命的傾向のみならず、神祕的、宇宙的傾向も明瞭に認められる。英国に生まれ、純粹に英人の血統から出ているにも拘らず、シエリは英

国に属しているというよりは広く世界に属しているといった方が適切に響くであろう。つまりシエリには二つの面があつたのであつて、革命的思想の所有者としての一面と、神祕的な普遍性を信じた、宇宙的精神の持主としての面が考えられる。ケンブリヂの英文学史においてC、H、ハーフオードも、政治という大きな砂漠に行くために文学という香り高い花園を捨てようとして考えたシエリについて触れている。いうまでもなくこの二つの面は一体をなし、或は同一の方向に並行して向つていて、切り離しては考えられないものであるが、この論文においてはシエリの神祕的な宇宙観を明瞭ならしめるために、特にシエリの神祕的理想世界の観念を彼の政治思想から区別し、際立たせようと思う。このようなシエリの特性として先ず考えられることは、シエリが普遍的な事柄に興味を抱いたということである。人間に関心を示す場合には、それは宇宙の一分子としての人間に対してであつた。彼の思想が全宇宙に撒かれることを希う彼の祈願は「西風の賦」のなかに表現されている。

Drive my dead thoughts over the universe

Like withered leaves to quicken a new birth !

And, by the incantation of this verse,

Scatter, as from an unextinguished hearth

Ashes and sparks, my words among mankind !

(Ode to the West Wind, ll. 63—7)

一、シエリの世界の抽象性

シエリはイギリス浪漫派の中でも、最も典型的な詩人であるが、一般に浪漫派とは無意識なものの発見者、云い換えれば地上を越えた理想の世界の発見者を云うのであろう。眼がいつも雲や空に向けられているのが浪漫的性格の特質である。シエリの詩もそのような理想の光によつて貫かれている。その世界は地上の国ではなく、驚異の国、想像の国であ

り、そこには人間が住んでいるというよりは人格化された自然力や生命力が住んでおり、古代の神話に語られた神々や人物が再び蘇つて行動する世界である。実際、シエリの詩を読むなら、有情化された自然物や、神話的な形姿や、精霊達が人間と同等の、或は屢々それ以上に重要な、意味をもつて登場することが知られる。シエリ自身、「クウィーン、マツプ」のなかで次のように歌っている。

Will not the universal Spirit ever

Revivify this weathered limb of Heaven?

(Queen Mab, ll. 21—22)

A・T・ストロングは、この遍在する精霊に対するシエリの信仰は最後まで存続すると述べている。この超自然的なものや靈的なものに憧れる心、自然物を有情化し人格化する傾向は浪漫派に共通の傾向であつて、シエリに特有の傾向ではないであらう。然しそのような自然力、生命力、神話的形姿がシエリの詩のなかでどのように存在しているかという問題は重要である。また高邁な思想、愛とか自由という抽象概念もシエリに特有の仕方で人格化され、呼びかけられている。従つてこのような人格化された抽象概念や自然力の住むシエリの理想世界もまた個性的なものでなければならぬ。そしてこのような世界はシエリの創造の本質的な部分を構成するものであつて、決して詩的創造の副次的な産物ではない。まことにシエリの想像力は新しい広さと深さを発見したと云い得るであらう。然しシエリの表現方法は屢々あまりにも流動的であつて、そのため直接的な仕方ではシエリの思想は表現されていないというのが一般の見解である。また、T・S・エリオットは、シエリの思想がまだ大人になつていない、青春期の思想であることを指摘している。従つてシエリの詩は概して明瞭な思想的根拠の上に立てられたものとは云い難いという見解が強かつたようである。その結果シエリによつて信じられた個有の影像も単に詩的な戯れであると見做されることが多かつ

た。然し我々はシエリの用いる言葉、影像をシエリの内部から発したものととして受けとらなければならない。シエリの詩の対象は具象的であるよりは抽象的であることが多い。シエリの詩は物体に即したものであるよりは、情緒や雰囲気、精神的なものや運動が音声や言葉になつたという趣がある。スバージョンによれば、「シエリはブレイクと同じく人間の想像力を神聖な創造的な力と見做したのである」。(4)

キーツの影像は具体性を持ち、シエリの影像は抽象性を帯びるということは批評家達の一致した意見である。もちろんシエリといえども全然具体的なものを詩の中にとり入れないわけではない。しかし全体の印象は捉え難く流動的な感じを与える。シエリの特質はR・H・フォゲルも指摘するように、具体的なものとは抽象的なものをきわめてシエリ的な仕方結びつけるということである。具体的なものや実際のものを非現実的なものや空霊なものに結びつけるのである。これはシエリの特徴を示すものであらう。たとえば「西風の賦」において、秋の木の葉を「眼に見えぬ所在より魔法の行者のもとを逃れゆく亡霊」にたとえる。

Thou, from whose unseen presence the leaves dead

Are driven, like ghosts from an enchanter fleeing,

(Ode to the West Wind, ll. 2—3)

また「ユーゲイニアの丘にて詠める詩」においては、空に浮ぶ太陽を「思想の翼を与えられた自由」にたとえる。

Lo, the sun floats up the sky

Like thought-winged Liberty,

(Lines written among the Euganean Hills, ll. 206—207)

或は「生の凱歌」において、太陽を、「その仕事に急ぐ精霊」にたとえる。

Swift as a spirit hastening to his task

Of glory and of good the Sun sprang forth

(The Triumph of Life, II. 1-2)

上に挙げた例は具体的なものを非現実的なものにしたとえた場合であるが、その逆の抽象的なものを知覚し得るものにしたとえた例もある。「理想美に捧げる詩」には次の例が見られる。

As summer winds that creep from flower to flower, —

Like moonbeams that creep from flower to flower,

(Hymn to Intellectual Beauty, II. 4-5)

これは美をたとえて云つた詩句であるが、夏の風や月光は知覚し得るが流動的な捉え難いものであつて、シェエリの特性を示す影象である。そしてフォゲルの云うように美は知覚し得る対象に作用することによつてのみ見えるものとなる。⁽⁶⁾このように抽象世界はシェエリにとつては決して非現実的なものではなく、むしろシェエリに熟知されている親しい現実であつた。このような抽象、或は象徴の世界がいわばシェエリの故郷であつた。ではシェエリのこのような抽象、或は象徴の世界はどのような内容を持つか、そのような世界にとつてどんな表現が相応しいものであるか、等の問題について考察を進めようと思う。

二、初期の詩における抽象世界——その概念的傾向

シェエリの初期の詩についてはJ・トドハンターは次のように云つてゐる。「シェエリの最も初期の散文、及び詩の試みに關してはせいぜいそれらのものが彼の後期の驚くべき多産の前兆と見做されるような、或る表現の流麗を示しているとしか云えない。」初期の詩においてはシェエリの象徴世界は後期の詩に比べればまだ萌芽に過ぎない。トドハンターによればシェエリの少年時の詩は大体十八世紀の教訓的、浪漫的、感傷的様式の弱々しい反映に過ぎないという。然し青年期の詩「アラスター」の一節を例にとりあげて見るなら、まだ萌芽であるとは云うものの、後期の詩を示唆するような象徴的な立場を示している。

..... "O stream !

Whose source is inaccessible profound,
Whither do thy mysterious waters tend ?

Thou imagest my life. Thy darksome stillness,

Thy dazzling waves, thy loud and hollow gulfs,

Thy searchless fountain, and invisible course

Have each their type in me : and the wide sky,

And measureless ocean may declare as soon

What oozy cavern or what wandering cloud

Contains thy waters, as the universe

Tell where these living thoughts reside, when stretched

Upon thy flowers my bloodless limbs shall waste

Y' the passing wind !

(Alastor, II. 502-14)

こゝではシェエリは流れを詩人の生命の象徴と見做している。グレイボムによればこゝでは生命の神秘的な流れと宇宙的な大洋との融合が描かれている。個人の生き生きとした思想が、その人の死と共に宇宙的思想の海に融合するように、個々の流れは大洋の中へと併合されると述べている。⁽⁶⁾このように初期の詩は既にシェエリの象徴的立場を示している。

或はもう一つの青年期の詩「To—」を取り上げてみよう。これは一八一四年から一八一五年の間に書かれた詩である。

Oh ! there are spirits of the air,

And genii of the evening breeze

And gentle ghosts, with eyes as fair

As star-beams among twilight trees : —

Such lovely ministers to meet

Oft hast thou turned from men thy lonely feet.

(To—, II, I—6)

上の二つの詩を考察するなら、シエリは流れとか空気のような自然の本質を初めから明らかに靈魂を持つた力として考えていたことが知られる。シエリはそれらの自然の力を人間的なものと考えた。というよりはむしろ人間から眼を転じて空氣の靈や風の靈などとの遭遇を求めたようである。泉や海の音、山の風の音などもすべてこの靈的な力を持つたものの声である。そのような自然力とシエリは對話をするのであつて、そこにシエリと自然との共感が見られる。もちろん詩人と自然との共感といふことはシエリに限つたことではなく、浪漫派の詩人達に共通の傾向であらう。従つてシエリがこの時期に抱いた自然に關する思想は普通の浪漫的なテーマであると云い得るだらう。この時期においてはシエリは伝統的、慣習的な考え方を脱しているとは云い得ないであらう。それは浪漫派の典型的な體驗であつて、未だ独自のシエリの體驗とは云い難いものであるかも知れない。然し自然の根源的な力が象徴的に歌われている、シエリの後期の象徴主義を暗示するものがある。

「クウィーン・マッブ」は初期の詩であり、そのなかに歌われている「Spirit of Nature」も詩的創造というよりは哲學的概念として感じられ、シエリの詩の世界に完全に融け込んでいないかも知れない。またストロングも指摘するように、まだゴッドウイン⁽⁶⁾ (William Godwin) の必然論の影響のもとにあつた時代の思想である。だがシエリの汎神論的思想、すべてのものに生命を与え、有情化する靈的な力を信ずるシエリの信仰の基礎をなすものは既に歌われている。

Spirit of Nature i thou

Life of interminable multitude ;

Soul of those mighty sphæres

Whose changeless paths through

Heaven's deep silence lie ;

Soul of that smallest being,

The dwelling of whose life

Is one faint April sun-gleams ; —

(Queen Mab, III, II, 226—232)

「クウィーン・マッブ」のなかでもう一つ注目されるべきものはヴェールの影像である。このヴェールのモチーフについては既にストロングが詳細に論じているが、彼の指摘するように、シエリはヴェールの影像を様々な文脈の中で、また様々な意味で用いている。然し最も典型的なものは、たとえば次の「クウィーン・マッブ」のなかの一節であらう。

And it is yet permitted me, to rand

The veil of mortal frailty, that the spirit,

Clothed in its changeless purity, may know

How soonest to accomplish the great end

For which it hath its being.

(Queen Mab, I, II, 180—184)

この例で見られるように、地上的なもの、肉体的なもののヴェールは引き裂かれなければならない。何故ならそれは精神の光や眞実を覆いかくすものだからである。ここにシエリのプラトンの思想が窺われることは、既にストロングも説いている。その本質的なものを地上的なヴェールがとり巻いているのだが、それを破つて、より純粹で、より本質的なものが現われなければならない。たとえば、

Pierce the thin veil of flesh that shrouds

The spirit's inmost sanctuary.

(The Retrospect, II, 137—8)

ストロングの指摘するように、シエリの確信は次のようなものであつた。即ち、眼に見える世界は眼に見えない世界への充分眞実とは云えない近似にすぎなかつた。だがその眼に見えない世界から、眼に見える世

界は最も薄い仕切りによつて隔てられているのである。一旦この仕切りが引き裂かれ、人々が生命を見、お互同志直面し合うならば、人々は懷疑や戦争や憎悪を止め、お互に愛し合い、信じ合うようになるだろう、というのである。⁽¹⁵⁾このようにして今や初めて眼に見えない世界が眼に見えるものとされるのである。フォゲルによればシエリの最も特色ある影像是有限と無限との關係を確立しようとする試みを現わしているという。この有限と無限との關係を主張することがシエリの影像の焦点であるという。そしてこの有限と無限との關係は最も屢々ヴェールの影像に現われると云つてゐる。即ち有限な肉体であるヴェールと、それに包まれている無限な真理の光との關係が見られる。「クウイン、マツプ」はシエリの最も初期の詩の一つであるが、その中に現われているヴェールの影像はシエリの生活を貫く根本思想を示していると考えられる。シエリは十八歳にして既にこのように欺瞞や幻覚や有限なものによつて限定されている地上の世界と、純粹な思想の、より高い無限な世界との差別を明らかに感じていたのである。シエリの詩を取り巻いている句と氣品との、あの模倣し難く捉え難い雰囲気は、シエリがより高い無限な世界を見ていることに起因するものであらう。

「理想美に捧げる詩」も初期の詩の代表的なものであるが、これはシエリの哲學的思想を示す詩であるといわれている。トドハンターによれば、この詩の抽象的擬人法は、彼が或る眞実の精靈を信じているということ、眼に見える現象の背後に作用している、或る個性的な生命力を信じているということの意味するものと述べている。⁽¹⁶⁾トドハンターは更にシエリがこの眞実の精靈を信じたということは、生命がないと想われている対象物の單なる修辭的擬人法以上のものになつてゐることを指摘している。我々はここにシエリが精靈または力という名で呼んで賞讃したところのものを見るであらう。これはシエリと精靈との關係がいかん生き生きした本質的なものであつたかを示す詩である。この詩はダウデ

ンの説くように、瑞西の風景を眼の前にした思想と感動の漲溢ではあるが、彼の云うようにその偉大さや榮光を精神的なものから借りてゐるのである。それは思想の世界を流れる河に似てゐるとダウデンは云つたが、まことにこの詩においては力に充ちた精靈がシエリの全世界を貫いて流れている。この詩は理想美の概念を明らかに示しているのみならず、またシエリが永続的にこの理想美の精靈と緊密に結びつくことを示している。エルトンも云うように、この詩においてシエリが美の下僕たらんとする誓の記録はシエリに相応しいものである。⁽¹⁷⁾シエリは美の精靈に呼びかけ、美の精靈を探し、美の精靈に問ひかける。尙この詩にはプラトンの思想の影響が明瞭に見られるのであるが、グレイボも云うようにプラトニズムはこの詩におけるよりも以上に「モン、ブラン」(Mont Blanc)のうちに、もつと豊富に、またもつと洗練された論理をもつて示されている。⁽¹⁸⁾然し「理想美に捧げる詩」はピーチも云うようにシエリのプラトニズムを同じ初期の詩「アラスター」におけるよりも明瞭に示しているという点で注目されるべきものであらう。第五節ではシエリが少年であつた頃、静かな洞窟や廢墟や星明りの森において空しく精靈を探した後で、この眞の精靈がシエリ自身によつて接觸し得るようになったことを歌つてゐる。

Sudden, thy shadow fell on me ;

I shrieked, and clasped my hands in ecstasy !

(Hymn to Intellectual Beauty, II. 59—60)

‘thy shadow’ というのは眞の精靈の影である。トドハンターによれば、それはシエリ自身の外部にある生命的な力でありながら、然もシエリ自身の心と密接な關係のある哲學的觀念であるという。⁽¹⁹⁾それは全く個人的な内部的体験であり、單に偶然にこの場所で恍惚ということが語られてゐるのではない。恍惚の感情はむしろ美の精靈の國へ行くための、シエリの心の内奥にある道である。既に第一節ではこの靈的な力、即ち

美の精霊の本質について多くのことが語られている。

The awful shadow of some unseen Power

Floats though unseen among us, — visiting

This various world with as inconstant wing

As summer winds that creep from flower to flower, —

Like moonbeams that behind some piny mountain shower, —

It visits with inconstant glance

Each human heart and countenance ;

Like hues and harmonies of evening, —

Like clouds in starlight widely spread, —

Like memory of music fled, —

Like aught that for its grace may be

Dear, and yet dearer for its mystery.

(Hymn to Intellectual Beauty, ll. 1—12)

ここではR・H・フオグルも云うようにシエリが美の特質に到達しようとして用いる影像そのものが、見られざる抽象的な概念を具体化している。美は花から花へ伝わって行く夏の風のようにであり、松しげる峯のうしろで降りそそぐ月の光のようである。この美は知覚し得る対象物に及ぼす作用によつてのみ見えるものとなる。何か捉え難い「力」の畏しい影、即ち理想美の影がちやうど夕暮の色合と調和のように、また星月夜にひろがる薄雲のように、ありとあらゆる人間の心と面ざしを、つかの間の輝きをもつて訪れる。このように見られざる美の精霊は知覚し得る対象物に及ぼす作用によつてのみ見えるものとなるが、この理想美の精霊の不安定性、掴み難さを表現するためにシエリが選んだ影像の種類、比喩の方法がシエリの特質を我々に示している。何故なら、風、光線、雲及び響はシエリの詩において最も意味の豊かな象徴となるものであり、同時にその風、光、雲、響、等はシエリの理想美の精霊の作用や

本質に対して内部的親近性を持つているからである。ハーバート、リードによれば、シエリの詩の最も美しい点は見るとちに消えて行くような、非常に軽やかな重さのないことであり、あらゆる影像は空気に溶け入り、あらゆる輪廓は火炎の中に融解して終うと云つてゐる。従つて風、光、雲、響等を比喩の対象として選んだということはシエリの特色を示すものであろう。それらのものは靈化された物質である。把握出来ないもの、絶えず流動し、変化するものである。この流動し変化する影像は理想美の精霊の本質と内部的に親しいのである。そしてスパージョンによれば「理想美に捧げる詩」は、このような理想美の精霊へのシエリの献身の最も明白な表現であるという。地上の事物は自己自身の力では決して美しくなり得ない。ちやうど光が地上のものに触れて初めて事物の個有の色彩が示されるように、理想美の精霊のような、眼に見えない力が射し込んで来なければ、地上の事物は価値を持たないという思想をシエリは発展させたのであつた。この思想のなかにプラトンの色彩の見られることはグリアソンなども指摘するところである。然し「理想美に捧げる詩」は初期の詩であつて形式はまだ適切なものとは云えないことはエルトンなども述べているところである。ここにはまだ哲学的、概念的なものが相当強く感じられる。シエリの独創的な形式はまだ到達されているとは云い得ないであらう。理想美の精霊の姿も、まだ後期の作品に見られる渾然たるものではなく、概念的な衣裳を纏つてゐる。

三、詩的感動の源泉としての自然

ではシエリが独自の形式、即ち単なる概念を越えたシエリに特有の擬人法を用いて、独自の靈的世界を歌うようになったのはいつかと云えば、それは「プロミーシユース、アンバウンド」においてであつた。然しこの大作に至る前にシエリは既に高い神祕に包まれた觀念に向つて立つのである。上述の「理想美に捧げる詩」においてもシエリはその高い

哲学的な思想を求める。「見られざる美の影」と呼ばれた、消えて見えなくなる「理想美の精霊」を求めて手を差し出す。この理想への探究と憧れはシェリの多くの詩の根本的な状態であると云い得るであらう。シェリは絶えずくり返し、より高いものに高まり、地上の羈絆、地上の重荷から脱れようという望によつて充される。たとえば我々は「イスラムの叛乱」において次のような表現を見るであらう。

To burst the chains which life for ever flings
On the entangled soul's aspiring wings.

(The Revolt of Islam, II, 938—9)

ここには上昇し、飛翔し、風と共に漂い、地上から高く遁れ去ろうとする希望が歌われている。高いものへの憧憬、上昇し飛翔しようとする望はシェリにおいて最も強く表現されている。靈的な力はそれ自身束縛されない、自由なものであり、地上の人間が為し得ないことを為し得るのである。

自然力に対してシェリが親近感を抱いていることは直ちに知られるが、シェリは自己を自然物の親近者として感じるのみならず、自然の諸元素はお互同志の間で親近に見え、また多様な仕方で結びついている。そこには自然の諸元素の間における新しい親和力の創造が見られる。たとえば「アラスター」の冒頭の一句にもこのことは明瞭に感じられる。

Earth, ocean, air, beloved brotherhood !

(Alastor, I, 1)

このように響や運動や色彩が皆一つに織り成されて、所謂共感覚 (synaesthesia) をなしている。フォグエルによれば響や運動や色彩等がすべて緊密に混り合っているのだ、それらは交替し得るようになるという。そのように自然の諸現象は融合し、共鳴するのである。フォグエルが共感覚の例として挙げるものは次のような場合である。

..... its music long.

Like woven sounds of streams and breezes, held
His inmost sense suspended in its web
Of many-coloured woof and shifting hues.

(Alastor, II, 154—7)

シェリは自己が偉大な自然の元素の中に立つていることを知る。彼は自己の愛をもつて自然の元素の恩恵に返禮しようとする。彼はいかに鳥や昆虫や動物達を自己に親近なものとして常に愛したかということ告白している。「アラスター」の中に次のような詩句がある。

If no bright bird, insect, or gentle beast
I consciously have injured, but still loved
And cherished these my kindred ;

(Alastor, II, 12—14)

トドハンターの言葉によれば、シェリは「アラスター」においてはじめて彼の声を発見し、人を恍惚とさせるような彼の歌を歌うという。シェリはこの詩において自然の元素が彼の詩に恩恵を与えてくれることを願い、母なる大地に向つて呼びかける。

Mother of this unfathomable world !
Favour my solemn song, for I have loved
Thee, ever, and thee only ;

(Alastor, II, 18—20)

更にシェリは次のように呼びかける。

I wait thy breath, Great Parent, that my strain
May modulate with murmurs of the air,
And motions of the forests and the sea,
And voice of living beings, and woven hymns
Of night and day, and the deep heart of man.

(Alastor, II, 45—9)

このように自然そのものと呼びかける態度のうちに我々はシェリの靈感の源泉を探るであろう。云うまでもなく文学の歴史においては古代から中世、及び文芸復興期を通じて屢々美の神や神託に出て来る神、或は比喩的な人物や抽象的な事柄が呼びかけられるのだが、このように自然そのものと呼びかけるということはシェリの重要な自己表白の一つであると思われる。詩はこのようにして自然の声や運動と諧音を奏でなければならぬ。詩の言葉と自然の声、或は運動とがこのように共鳴するということは浪漫派の詩の特質である。従つて殆んどすべてのシェリの詩においては自然が雲に聳えている。また直接自然を歌つた詩ではなく、抽象的な概念を表現しようとした詩においても同様に詩の言葉と対象とは共鳴するということが云えるであろう。そして自然が聳えている詩はシェリの作品にあつては非常に数が多い。然しシェリ自身は自然の印象、自然の影像、自然の事物の感得というようなことに満足するような、そういう意味での純粹な自然詩人ではない。彼はいつも何かより高いものの、觀念とか理想とかを求める。我々はここでアーサー・シモンズの言葉を想い起すであろう。「想像力には二つの種類がある。即ち形体を賦与する想像力と、形体から解放する想像力とである。シェリの想像力は生き物を地上のものならぬ要素で充し、或はそれらのものを地上のものならぬ衣裳をもつて包み、形体から解放する想像力である。ワーヅワスの想像力は形体を賦与する想像力である。精神を人間に集注し、自然を一本の野生の花に集注する」⁽³¹⁾即ちシェリは自然の中にあつて、しかも自然を越えて啓示される精神を求めるのである。自然は流れや、海や、風や、雲や、深淵や、山として詩の中に歌われている。それはシェリにとつて表現の手段である。然しシェリにとつて風景の描写が問題なのではない。これはシェリの特徴を示す事柄である。フォゲルによればシェリはごく稀にしか風景の細部を究めることをしない。またフォゲルは次のようにも云つている。「シェリは屢々対象物を背景と一致させるため

に手近にある対象物を一般化し、雰囲気現象を描く。⁽³²⁾」アーサー・シモンズはシェリのこのような傾向をシモンズ流の表現で云い現わしている。即ち、「シェリは我々に細部を与えることよりも、感情を与えることを非常に望んでいるので、細部は薔薇色の霧の中にあつて、出て行かないのである」という。⁽³³⁾シェリは風景の大きな一般的な形式のみを名づける。海とか、湖とか、流れとか、山とか、丘とか、峡谷とか、淵とか、岩礁などである。我々の眼前には到る処に自然がある。だがその自然を通して自然以外の何か他のものが輝き出るのである。それはいわば靈的な力を持つた、精靈化された自然である。或は固い形体を持つた、静止した自然が溶解して、動的な世界に変化すると云つていいかも知れない。シェリの特質について A・C・ブラッドリは次のような批評をしている。即ち、

Life, like a dome of many-coloured glass,
Stains the white radiance of eternity,

(Adonais, ll. 462-3)

とシェリは「アドネイス」のなかで歌つているが、人生は多彩な色硝子のドームのように、「永遠の白光」を彩る、と共に、一方多くの色彩というのは白光の分裂したものであるという事実をシェリは忘れる傾向があるとブラッドリは云つている。シェリの詩にあつてはあらゆる不完全な存在は全く余計なものとして現れ勝ちであり、またすべてのものや、すべての人物は純白、または漆黒として描かれ勝ちである。それ故にまた善に関する彼の理想もリアルな存在の集積から抽象したものの上に依存している故に、肉体や個性を缺き勝ちである。然しシェリの長所と弱点とは密接に結びついており、彼の理想の抽象性そのものが、理想への熱望の震えるような激しさを生み出すための一つの条件となつているかも知れない、という意味のことを云つている。⁽³⁴⁾シェリが風景の細部を究めないこともこのシェリの特質によるものである。従つてシェリにとつ

てこのような自然は靈的な力が作用する特殊な世界でなければならぬ。何故ならシェリが把握しようとするところのものは自然の肖像ではなくて、自然の作用する力であるからだ。全自然はシェリにとつてその存在が重要なのではなく、その作用が重要なのである。自然はもはや一つの存在ではなく、生成し作用するものであるという感情をシェリは抱いたようである。物体が存在するということが重要なのではなく、むしろ流出し、遠くへ運ばれる力として、また作用として、雰囲気として、その物体から発するもの、それがシェリの空想に触れ、シェリの言葉に表現されて生氣を帯びる。それ故シェリには物体から発する輝き、物体から発散する霧のようなもの、物体から放射される光が物体そのものよりも重要である。シェリの弱点といわれる漠然性も実はこのようなシェリの性質から発しているのであつて、見方によつてはシェリの長所でもある。ブラッドリのいうように強さと弱さとが密接に結びついているのである。表現される言葉もそれに相應しく放出や発散、流出や放射、呼吸等を示す言葉が多く見られる。このようにシェリは自然の中に静止するものではなく、変化するもの、また一つの状態から他の状態へ移行するものを見たのである。シェリは自然の中に旋律や運動を見るのであつて、一様に停止している存在を見るのではない。すべてのものはシェリはとつて運動に置き換えられる。従つて最も強力に変化するものの、たとえば空気が、水、火、風、海、光、雲のような流物的な、湧き出るような影像が登場する。これがシェリの特徴の一つである。またエルトンも指摘するように 'sea', 'tempest', 'all' 等の流動的、包括的な語と合成された言葉が多いということもシェリの顯著な特色である。

シェリの特徴として更に挙げられるべきことは、シェリの詩は多くの点で夢と幻影の世界に猝えていることであろう。そこにあるものは驚異と魅惑の世界である。従つてその世界は人間の住む世界というよう

りは、靈的な力の存在する世界と云い得るであらう。然しシェリはそのような世界を日常の面に近づけるよりは、むしろ彼の特有の雰囲気やイメージの世界、夢の世界へと高める。シェリは自然の風景を高め、靈化する。風景は靈的な力をもつて充され、いわば象徴的になつてゐる。そのような夢幻の世界のなかには生命や自然の人格化された力、即ち精靈的なものが住むということとは「ユーゲイニアの丘にて詠める詩」において明瞭に示される。

Other flowering isles must be
In the sea of Life and Agony;
Other spirits float and flee
Over that gulf: even now, perhaps,
On some rock the wind wave wraps,
With folded wings they waiting sit
For my bark, to pilot it:

(Lines written among the Eugeanean Hills, II, 335—41)

この詩においても他の詩におけると同様、精神化、非物質化の過程が描かれているといつていいであらう。このような世界にあつてはフォグも云うように、光も匂も融り合つてゐる。それは次の例に見られるであらう。

..... an air-dissolved star
Mingling light and fragrance,

(Lines written among the Eugeanean Hills, II, 289—90)

こゝでも光と匂の親和性が見られ、シェリに特有の共感覚 (synaesthesia) の見事な結晶がある。

さて、このようにシェリの影像や象徴を取上げて見るならば、我々はそこに繰返しや同種類の影像が非常に多いことに気付くであらう。グレイボーの云うように、シェリのテーマ、影像、象徴は数は比較的少い

が、屢々くり返される。このように主題が屢々くり返され、同じ種類の影像や象徴が用いられるということは、シエリが特定の思想に強い関心を持つてゐることを示すものであらう。⁽⁸⁵⁾それは單なる知的な思いつきを越えた、深い精神的確信に基くものである。

四、「プロミーシユース・アンバウンド」に見られる

シエリの特質

(a) シエリの詩の非形体性——古代神話との相違

シエリの特質たる精神化、非物質化の過程を考える際に、我々は「プロミーシユース・アンバウンド」を論じないわけにはいかないだらう。この詩はシエリの抒情的天才の昇華した精髓であり、シエリの壮年時代に入つたばかりの時期の見事な結実であるといわれる。トドハンターはこの詩をモーツアルトの「ドン・ジョヴァンニ」(Don Giovanni)と同様に世間のために書かれたものではなく、作者自身の喜びのために書かれたものであると云い、この詩が他のすべての抒情詩に対する關係は、ちやうどベードーヴェンの第九交響樂が他の交響樂に対して持つてゐる關係と同じであると云つてゐる。⁽⁸⁶⁾ストロングによれば「プロミーシユース・アンバウンド」はそのテーマと背景によつて、シエリの信念を現わしてゐるすべての詩のうち、最も象徴的で、日常の生活からは最も遠いものであるという。⁽⁸⁷⁾そこに登場する人物もすべて精靈的な存在である。それは Hous とか Furies とか、また Spirit of the Human Mind のような精靈達である。また、Earth, Ocean, Asia 等も靈的な力を持つた存在と考えられてゐる。

「プロミーシユース・アンバウンド」は抒情的ドラマと考えられてゐるが、この詩においてシエリは古代の神話の地盤に立つてゐることが知られるであらう。然しシエリの詩の特質として考えられなければならないことは、古代の神話に見られる形体的な明瞭性や肉體性はシエリにあ

つては全く消失してゐるということである。この点において「プロミーシユース・アンバウンド」の世界は古代の神話の世界とは根底的に異つたものと云い得るであらう。「プロミーシユース・アンバウンド」を讀みはじめると我々は直ちにシエリの象徴的な雰圍氣を濃厚に感じる。靈的な力を持つた自然の諸々の力が生き生きと感ぜられる。我々は其処に空氣や、山や、泉や、風の声を聞きわけらるであらう。たとえば、

The genii of the storm, urging the rage

Of whirlwind, and afflict me with keen hail.

(Prometheus Unbound, Act I, ll. 42—43)

whose many-voiced Echoes, through the mist

Of cataracts, flung the thunder of that spell !

(Prometheus Unbound, Act I, ll. 60—61)

And ye swift Whirlwind, who on poised wings

(Prometheus Unbound, Act I, l. 66)

グレイボーはシエリの特質について次のように云つてゐる。即ち、シエリの想像力はあらゆる生命のない形体に生命を与えるが、彼の好みは個性的な運動の力を持つたものに向けられてゐる。⁽⁸⁸⁾次の一節にもシエリ

の特質は明らかに見分けられる。

Ione : But see, where through the azure chasm

Of yon forked and snowy hill

Trampling the slant winds on high

With golden-sandalled feet, that glow

Under plumes of purple dye,

Like rose-ensanguined ivory,

A Shape comes now,

Stretching on high from his right hand

A serpent-cinctured wand.

Panthea : 'Tis Jove's world-wandering herald, Mercury.

(Prometheus Unbound, Act I, ll. 316—325)

ここでも古代神話に出て来る道具立ては見られる。即ちマーキュリーの金のサンダル、蛇の巻きついた杖はある。然しマーキュリーの外貌はたゆとう美の光と風景の中へと沈んで行く。いわば一つの光り輝くヴィジョンに過ぎない。マーキュリーがどんな具体的姿を持つているかは書かれていないが、マーキュリーがどんな具体的姿を持つているかは、はつきり判らない。ここでも運動の印象が支配的である。ここでは我々は古代神話の明瞭な形姿を見るよりは、精霊にも似た靈的な力の存在を強く感じるであらう。フォグルはこのことについて次のように云っている。「プロミーシユース・アンバウンド」におけるプロミーシユース・ジュピター・マーキュリーは殆ど肉体を持つていない。この詩の結末をなしている愛による人間と自然との理想的な結合は、肉体的、本能的ではなく、知的であり、哲学的である。まことに神話的な存在はシェリにあつては肉体を持たない象徴のように見える。たとえば次の例においても形姿を持たない運動を感じるのであらう。

We are steaming up from Hell's wide gate

And we burthen the blast of the atmosphere.

(Prometheus Unbound, Act I, l. 518)

或は紫の夜を通じて嵐のように進んで行く、Hours (時靈)の美しい描写を考えてもよい。ここにも我々は彫塑的な形体を見るのではなく、嵐のように彼方へと飛んで行く運動の姿を看取するのであらう。

through the purple night

I see cars drawn by the rainbow-winged steeds

Which trample the dim winds ;

(Prometheus Unbound, Act II, Sc. IV, ll. 129—131)

b) 光と響と運動の交錯——全一への憧憬

シェリの詩において非常に特色ある点は、既に述べたところであるが光と響と運動の印象の交錯である。わけでも「プロミーシユース・アンバウンド」にはこの特色が最も鮮明に定着されている。たとえば第一幕に次のような個所がある。

Ione : Beholdst thou not two shapes from the east and west

Come, as two doves to one beloved nest,

Twin nurslings of all sustaining air

On swift still wings glide down the atmosphere ?

And, hark ! their sweet, sad voices ! 'tis despair

Mingled with love and then dissolved in sound.

Panthea : Canst thou speak, sister ? All my words are drowned.

Ione : Their beauty gives me voice. See how they float

On their sustaining wings of siecy grain,

Orange and azure deepening into gold :

Their soft smiles light the air like a star's fire.

(Prometheus Unbound, Act, I, ll. 752—62)

光、響、及び運動はシェリの共感覚的影像形成 synaesthetic image-ry) の最も特色ある素材であり、それらは多種多様な関係に結合され、滲透し融合しているということをフォグルは指摘している。⁽⁶⁾「プロミーシユース・アンバウンド」において精霊が登場する際には、光と音楽との幻影的な光景が織り込まれる。わけでも光の影像が織り込まれている。何故なら光と精霊とは分つことの出来ない一体の存在だからである。シェリにおける光の比喩は文学的影響によつて誘導されたものではない。むしろシェリに自然に備つたものである。シェリはこの点において強い個性的刻印を遺し得た詩人であると云い得るのであらう。シェリの光の比喩は重要な意味に充ちており、またシェリの思想世界を解く重要な鍵となつてゐる。

上に挙げた 'glide down the atmosphere' とか 'how they float on their sustaining wings of sticky grain' とかの影像是すべて地上の世界を越えた神秘的な力が住んでいる世界に相應しいものである。このように浮遊したり滑走したりする影像是「プロミーシユース・アンバウンド」に非常に多い。たとえば、

That terrible shadow floats

Up from its throne, as may the lurid smoke

Of earthquake-ruined cities o'er the sea.

(Prometheus Unbound, Act I, Sc. IV, ll. 150—51)

And hither come, sped on the charmed winds

(Prometheus Unbound, Act II, Sc. III, l. 40)

Walk upon the winds with lightness.

(Prometheus Unbound, Act II, Sc. V, l. 69)

It floats along the spray of the salt sea,

(Prometheus Unbound, Act III, Sc. IV, l. 10)

Dizzy as with delight I floated down,

(Prometheus Unbound, Act III, Sc. IV, l. 106)

光や響の影像是運動の影像と結合される。それらの結合は幾つかの点を結んだ一つの静止した線としてではなく、本質的な流動するものとしてシエリの空想を刺戟する。運動そのものがシエリの詩の旋律や音声になつたという趣がある。sound-motion, sound-color-motion と云ふような結合をフォグは指摘しているが、それはあくまで直線的結合としてでなく、流動的な融合として考えられなければならない。音響、霧、芳香、風、雲、光の輝きはシエリにあつては運動の觀念と結びついている。従つてそれらのものは滑走し、浮遊し、流動し、溢れるものである。シエリのすべての詩がそのような影像で充されているといつても云い過ぎではないだろう。上に挙げた 'glide' とか 'float' のような動詞

はシエリの最も愛好する觀念である。それらの動詞はたとえば上昇の觀念を現わすもの、soar, arise, ascend, 融合の觀念を現わすもの、mingle, mix, diffuse, 自己溶解の觀念を現わすもの、melt away, dissolve 等のように、シエリの全詩作を一条の光線のように貫いている。その用例については F・S・エリスの Concordance が詳細に示している。このように融合し、上昇し、自ら溶解する觀念はシエリに特有のものであつて、調和、全一に対するシエリの憧憬を示しているものと云えるであろう。フォグの云うようにシエリは変り易い、果敢ない、偶然的な色彩のドームを越えて、上昇し、絶対者の究極の清淨と融け合うことを切望する。スペクトルの色彩が白光に融合するように、シエリの共感覚的 (sympathetic) な諸々の影像是抽象へと昇華するように思われる。シエリの愛好する觀念を人々は特異なものと考えるかも知れない。だがむしろこのような觀念こそシエリの知覚の根本的立場を示しているものと云い得る。

(c) 事物の本体を包む雰囲気としての光と響

雲もシエリにとつて重要な意味を持つてゐるが、グレイボーによれば「雲がシエリに対して持つてゐる情緒的な興味は一部分はその光の効果によるものである——そしてシエリは光に關係を持つあらゆる現象の鋭敏な觀察者であつた」⁽⁴³⁾ 従つて靈的な存在が現われるときには光や響の影像を伴うことが多い。

Panthea : See, where the Spirits of the human mind,

Wrapped in sweet sounds, as in bright veils, approach.

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 81—2)

こゝでも 'Spirits of the human mind' が輝くヴェールに包まれたように響に包まれて現われる。精霊はいわば個有の雰囲気を自分の周りに持つてゐる。ヴェールの影像については先に触れたが、こゝに描かれたヴェールは眞実を覆ひ隠すヴェールとは異なるものである。こゝではヴ

エールは包み、保護する性質を持つてゐる。神聖な、靈的なものは、ちやうどヴェールによつて包まれるように、光や響によつて包まれるのである。ストロングによれば、ヴェールの象徴は光に用いられるとき、中立的な意味で、或は美に寄与する意味において用いられる。我々はこのようなヴェールとしての光の影像を更に「プロミーシユース・アンバウンド」のうちに見出すであらう。

And thou

Ascend beside me, veiled in the light

Of the desire which makes thee one with me,

(Prometheus Unbound, Act III, Sc. I, ll. 33—35)

the animation of delight

Which wraps me, like an atmosphere of light.

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 322—23)

光はシェリにあつては物体の形姿や輪廓を明らかにするためのものではなく、むしろ物体から放射され、一つの雰囲気として物体の周囲にあるものである。シェリの描くものはすべてその周囲に一つの雰囲気を持つてゐる。

(d) こたまの印象

響のなかにはこたま (echoes) が考えられるが、それは空靈で呼吸のよくな、シェリの特質をよく伝えるものである。シェリの、浮動するもの、融けて消えるもの、空気のよくな不安定なものを愛好する気持は「こたま」において最も純粹に表現されている。たとえば次のような詩句がある。

Echoes we : listen !

We cannot stay :

As dew-stars glisten

Then fade away—

北大文学部紀要

(Prometheus Unbound, Act II, Sc. I, ll. 166—9)

上述の例に見られるように、「こたま」は一種の靈的な存在であるが、姿は見られず、声として、また響としてのみ感じられる。シェリの詩においては、音響が、音楽であるうと声音であるうと、詩のなかに織り混ぜられている。それは把握出来ないもの、眼に見えないものであり、然も感覚には認められるものである。そこにはシェリの特質が定着されている。光や風のように響もまた流れるものであり、姿なきものであり、自由に振動するものであり、自ら変化するものである。シェリの想像力はそれらのものを廻つて絶えず回転する。声音は人間の肉体から発するが、肉体を脱した靈的なものであるとシェリは考えていたようである。フオグルによればシェリの音楽は美しいが個別化されず稀薄である。即ちある漠然とした一般的な音響であるという。フオグルはその例として「プロミーシユース・アンバウンド」のなかから次のような例を挙げている。即ち 'a sea profound of ever-spreading sound' (Act III, Sc. I, l. 84) 及び 'The ocean-like enchantment of strong sound' (Act IV, l. 203) である。それはシェリに特有な漠然とした響に充ちている。風や雲と同じように響もまた遠くへ運ばれて行くのである。我々はこたまの有名なエイシア (Asia) の歌を想起するのであらう。

My soul is an enchanted boat,

Which, like a sleeping swan, doth float

Upon the silver waves of thy sweet singing ;

(Prometheus Unbound, Act II, Sc. V, ll. 72—74)

フオグルも指摘するように、こたまには 'music-water-color-motion' の精妙な複合が見られる。(46) この共感覚においてもシェリが現実のヴィジョンの世界を越えて窮極の統一へ高まろうとする傾向を認めることが出来る。

また上述の例における 'boat' の象徴はシェリの象徴のなかでも特に

重要であつて、ストロングは次のように云つてゐる。「もし流れ(stream)が宇宙と、あらゆる人間生活を貫いて流れる思想の普遍的な流れであるとすれば、ボートはその流れによつて受け入れられ、その精神的完成へと押し流される個々の人間の魂である。」⁴⁷従つて我々は「ボート」の象徴のうちに、或る現実の世界を越えた神祕的な調和、完成に達しようとするシエリの意図を汲みとることが出来るであらう。

(e) 空間の広さと宇宙観

「こだま」が地下の未知の世界へとエイシアを導こうとする歌は二幕三場に見られる。

To the deep, to the deep,

Down, down !

Through the shade of sleep,

Through the cloudy strife

Of death and of Life ;

Through the veil and the bar

Of things which seem and are

Even to the steps of the remotest throne,

Down, down !

.....

Through the gray, void abyss,

Down, down !

Where the air no prison,

And the moon and stars are not,

And the cavern-crags wear not

The radiance of heaven,

Nor the gloom to Earth given,

Where there is One pervading, One alone,

Down, down !

(Prometheus Unbound, Act II, Sc. III, ll. 54—62, 72—80)

このように遙か下方に降つて行くとき、地上において観照され得るものはすべて姿を消して終う。そして眼前に思い浮べられないものを想像力が表現しようとする。シエリの想像力はこのような詩においてその極限に達したと云い得るであらう。我々人間が覗き見ることの出来ない世界を観照することは、シエリのような自由な精神のみがなし得るところである。フオグルはこの個所を引用して、シエリの上昇の影像是下降の影像によつて補われると云つてゐる。そして「プロミシーユース・アンバウンド」のなかのこの精霊の歌は眩暈を感じさせるような、垂直な下方への突進の感じを呼び起す、と述べてゐる。⁴⁸

この上昇或は下降の影像と関連して、測るべからざる広さを持つた風景、空間の広さが念頭に呼び起される。シエリの空間は更にシエリの精神と密接な関係がある。シエリの自由な精神のみが自由奔放にこの広い空間をさまようことが出来る。それ故シエリの精神は空間の広がりを経験し、またあのように包括的に世界を観照し得るのである。たとえば次の例にはこの広大な空間が感じられるだろう。

As over wide dominions

I sped, like some swift cloud that wings the wide air's

wilderness.

(Prometheus Unbound, Act I, l. 763)

或は次の精霊の合唱にも広さの感情は現われ、

We are free to dive, or soar, or run ;

Beyond and around,

Or within the bound

Which clips the world with darkness round.

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 137—40)

次の例もひとしく空間の広さを感じやする。

We encircle the ocean and mountains of earth

(Prometheus Unbound, Act IV, l. 172)

こゝでは自然の領域と精神の領域とは融合し、二つのものが一つの総合的な観照のなかで見られる。即ち精神はすべてのものを把握し包括している。次の例においても我々はそのことを明瞭に感じるであらう。

But now, oh weave the mystic measure

Of music, and dance, and shapes of light,

Let the hours, and the spirits of might and pleasure,

Like the clouds and sunbeams, unite.

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 77—80)

こゝには 'unite' という言葉が現われるが、これは「プロミーシユー・ファンバウンド」の第四幕に見られる特有の key word である。地上の世界を越えた高い統一が実現されなければならないというのがシエリの理想であつた。そこではすべて対立するものは止揚されなければならない。このより高い統一という問題はシエリの全詩作を貫いているテーマである。その統一の世界においてはすべての境界線は止揚される。シエリは愛と善と智慧に充ちた新しい、よりよい世界の建設を絶えず夢みていたのである。

シエリに特有の共感覚 (synaesthesia) も宇宙的、精神的統一を求める意識的、知的な探究の詩的な表現であつて、フォグルによれば、この統一を求める探究においては、異なる物理的現象が一つのものに溶け合うことは理想的統一を象徴している。そしてシエリの詩的思想の頂点をなす「プロミーシユー・ファンバウンド」の第四幕はこの感覚を超越した統一への恍惚たる讃歌であると云つてゐる。シエリのこの境界線を止揚した新しい精神の統一を求める夢は次のように表現される。

And our singing shall build

In the void's loose field

A world for the Spirit of Wisdom to wield ;

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 153—5)

この第四幕は対立するものはすべて愛によつて統一され、融合されることを歌つた素晴らしい終曲であるが、こゝでは大地の霊と月の霊との二つの輝くヴィジョンによつて最後の高まりが示されている。そこでは音楽と光とが交流し、また相互に循環し旋回する天体の運行が見られる。それらの天体はいわば相互に組み合わされた運動をなしている。たとえば、

Thou (the Earth) art speeding round the sun,

Brightest world of many a one ;

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 457—8)

I (the Moon), thy crystal paramour,

Borne beside thee by a power

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 463—4)

地球と月とは第四幕における中心の影像であつて、その圏内においては精霊達が無数の運動をなしつつ旋回している。トドハンターによれば月は女性であり、白い炎の純潔、即ち愛に充ちている。地球は旋風の諧調をもつて露進し、すべてのものを征服する素晴らしい男性的な力であるという。⁽⁵⁵⁾シエリの世界においてはこのような天体はすべて調和をなして共存し、光や響や霞等、あらゆる感覚に触れ得るものは一緒に流動するのである。このことは次のパンシア (Pantia) の歌に見られる。

And from the other opening in the wood

Rushes, with loud and whirlwind harmony,

A sphere, which is as many thousand spheres ;

Solid as crystal, yet through all its mass

Flow, as through empty space, music and light;
Ten thousand orbs involving and involved,
Purple and azure, white, green, and golden,
Sphere within sphere; and every space between
Peopled with unimaginable shapes,
Such as ghosts dream dwell in the lampless deep;

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 236-45)

「プロミシユース・アンバウンド」の第四幕には、万有は愛によつて充されるという思想が貫いているが、この全地上を充す新たに蘇つた愛が月の世界にまで滲透して行く。この影響力はシェリにあつては一つの靈的な力と考えられている。それは暖かい光線のように月に滲み通つて来る。月の靈は地球の靈に呼びかけて次のように云う。

Some Spirit is darted like a beam from thee,

Which penetrates my frozen frame,

And passes with the warmth of flame,

With love, and odour, and deep melody

Through me, through me!

(Prometheus Unbound, Act IV, ll. 327-31)

同様に大地もこの新しい力によつて滲透される。大地の靈は次のように云う。

It interpenetrates my granite mass.

(Prometheus Unbound, Act IV, l. 370)

ここでもまたシェリの特有の観照が示されている。シェリはあらゆる本質を閉されたものとして、またそれだけで孤立しているものとしてではなく、むしろ世界の作用する力や影響に対して開かれており、また滲透され得るものと考えている。フォゲルの云うように、月や地球は単純な、然も明確な、充分に認められる輪廓を持つてゐるが、またシェリは

ここで不確定と確定性とを結合している。感覚上の知覚に対して最も注意深い関心を払いながら、然も感覚上の知覚を慎重に超越している。地球や月の靈の形は人間には想像し難いものである。人間、或は物体の形姿はシェリにとつては何等限界を意味しない。それらのものは隔離された、孤立した存在ではない。たとえそれらのものの間に境界線があつたとしても、シェリはそれらの限界をより高い統一へと止揚している。ここでは精神的な流れが相互に交流し合う。シェリの詩にあつては、それ故世界のあらゆる本質や現象は眼に見えない、流れる力の織物によつて相互に緊密に結びつけられている。同感、愛、理解、希望等はシェリによつてこのような流動する影響力として理解される。

シェリの宇宙観の特質を示すものとして、「プロミシユース・アンバウンド」と殆ど同時代の作品「天上の賦」(Ode to Heaven)が考えられる。ここではシェリの宇宙的精神の、あの包括的な思想が現われる。太陽系や惑星の系列は自然の最も薄い血管を通じて流れる血の点滴にたとえられる。トドハンターも指摘しているように、精霊達は宇宙の精神の一部分にほかならないし、天そのものも露の一滴にほかならない。即ち全宇宙はここでは巨大な有機体として観照される。

What are suns and spheres which flee

With the instinct of the Spirit

Of which ye are but a part?

Drops which Nature's mighty heart

Drives through thinnest veins!

(Ode to Heaven, ll. 41-44)

ここではシェリの詩における宇宙的広大さの最も包括的な観念が示されている。「プロミシユース・アンバウンド」において詩の核心をなしている宇宙的広大さは「天上の賦」においても明瞭に現われている。

五、自然に対するシェリの態度

我々は更にシェリの自然を歌つた詩「西風の賦」「雲」「雲雀に」等においてシェリの象徴はどのように現われているかを考察してみよう。シェリはこれらの詩において自然を客観的に歌うことはしなかつた。ここでもシェリは西風や雲や雲雀を靈的な力を持つた精靈のように考えて呼びかけている。ここで注意すべきことは西風を「自由奔放なもの」と呼び、雲雀を「快活な精よ」と呼んだような個々の事実だけが重要なのではない。むしろシェリが自然の世界を体験する際の総体的な把握の仕方が重要なのである。従つて西風を奔放な精靈にたとえている詩句、たとえば *Wild Spirit which art moving everywhere* (l. 13) 及び *Ba thou, Spirit fierce, my spirit* (ll. 61—62) の如きは自然力が靈的な存在であることを明瞭に現わしたものであるが、たとえこの句がなかつたとしても、この一篇は靈的な力を歌つた詩と見做されるべきであろう。シェリは西風に向つて呼びかけるのだが、このことは対象がシェリによつて全く人格的に、生きた存在として把握されていることを意味するものである。西風はシェリの運命に直接關係する生きた存在である。だが西風がシェリによつて呼びかけられるというだけでなく、シェリ自身も風の靈に似ていることが歌われる。

A heavy weight of hours has chained and bowed

One too like thee : tameless, and swift and proud.

(*Ode to the West Wind*, ll. 55—56)

シェリの熱烈な憧憬、即ち西風に対する内部的親和性から、西風の持つ自由と力とに関与しようとするシェリのがれは他に類例を見ないほど強い印象的な表現を得ている。ここでも西風はシェリによつて根源的な生命力、作用力と見做されている。西風は恰も生命の息吹きのように万物を呼び覺し、死のようによつてすべてを破壊し砕くことが歌われている。

る。それは変化し、靈感を与え、予言する。西風の本質は変らないが、西風の現われる仕方は多様である。西風は生命力あるもののように変化し、また西風が触れるすべてのものを変化させる。それ故多様な現象は西風に關係づけられ、西風によつて統一される。即ち地上の多様な現象はより高い統一に關与するのである。シェリ自身が根源的な自然の力に合致しようとする。即ち、一枚の葉に、雲に、また大浪に変化しようと思ふ。風によつて捉えられ、また彼自身西風になりたいという望にまで高まる。

Ba thou, Spirit, fierce,

My spirit ! Ba thou me, impetuous one !

(*Ode to the West Wind*, ll. 61—62)

シェリの詩は西風の力から人々を揺り動かし、予言する力を創造しなければならぬ。このように自然の靈的な力に献身し、合体するとき、シェリと自然力との間の緊張は消える。自然の世界と精神の世界とはこの詩において統一される。トドハンターの云うように、感覚の世界と精神の世界との相似にシェリは想を凝らす結果、二つの世界を隔てるヴェールは取り去られるように見える。このように風はシェリにとつて非常に包括的な象徴であるように見える。しかも西風の本質は捉え難い。従つてそこに見られるものは疾風のような速度の感覚である。

Thou on whose stream, mid the steep sky's commotion,

Loose clouds like earth's decaying leaves are shed,

Shook from the tangled boughs of Heaven and Ocean,

Angels of rain and lightning

(*Ode to the West Wind*, ll. 15—18)

もちろん、この詩のなかの影像について異論がないわけではない。F. R. リーヴィスはシェリの影像の曖昧さを指摘して、「ちぎれ雲」と「朽葉」とはどんな点で似ているかと質問している。また「tangled boughs」

of Heaven and Ocean' についても具体的に示し得るような何物も現わしてはいないことを指摘している。然し我々はむしろ次の I・A・リチャーズの言葉に学ぶべき多くの点があるように思われる。リチャーズは影像の価値を定める尺度は強い視覚性そのものではなく、むしろ意味であり、また感情と結びついた関係の中にあることを主張して次のように云っている。即ち影像の感性的な特質、その活力、明晰さ、細部の充実等はその影像の効果に恒久的な関係を持つていてのものではない。従来影像の感性的特質に対していつもあまりに多くの重要性が与えられて来た。影像を効果的ならしめるものは影像としての視覚的鮮明さよりも、むしろ感情と結びついた場合の影像の性質である、という意味のことを云っている。我々は「西風の賦」を読むとき、すべてのものは西風と融合し、個々のものは明確さや鮮明さを缺くとしても、それら個々のものが西風の特有の雰囲気によつて統一されているのを感じるであらう。見られるよりは感じられるということがシエリの描く世界の特質である。

次に我々は「雲」をとりあげて見よう。雲は浮遊する自然力として、また他のすべてのものに生命を与え眼覚ますものとして、然も自らは変化するものとして観照される。雲もまた何か捉え難い力のように、何等はつきりした形姿を持つていない。その本質は絶えず変化し、把握出来ないということであり、多様な形と作用を持つことが出来るということである。シエリはこの詩において対象である雲と全く一致している。それは想像力の驚くべき業である。フォグルによれば、シエリは速力と高さの眩暈するような影像において雲と一致するが、その経験はシエリに特有の個人的なもので、他の誰かが辿ることの出来ないところまでシエリは行つたのであるという。この詩において雲の多彩な作用を辿つて見ることは興味あることであるが、紙面の都合上省略して、「雲雀に」をとりあげて見よう。

「雲雀に」においては雲雀は冒頭から精霊として呼びかけられている。

'Hail to thee, birth Spirit!' という書き出しがそれである。雲雀は垂直に空へと飛び上つて消えて終う。雲雀の出現も音楽と光に包まれてゐる。このように天上の世界へと飛び入り、光明に満たされ、完全に肉体を離脱している。そしてあこがれて天上を見上げている人間に対して響は空から雨のように注ぎ落ちる。

As from the presence showers a rain of melody.

(To a Skylark, l. 35)

だが地上の人間にとつては、その高い秘密に充ちた世界に入つて行くことは出来ない。人間はそれ故、雲雀に問いかけ、雲雀に求めるだけである。雲雀の世界においてはあらゆる肉体的に重いもの、あらゆる倦怠や煩わしさは抛棄される。上昇し、地上の重さの羈絆から脱れようとするシエリがあこがれば、この火の雲のように地上から飛び立つ雲雀の象徴において純粹にして比類のない表現に達したのであつた。尙、この詩においても、光や響が一つの感情のなかへと溶け入る、共感覚が見られることはいうまでもない。シエリの共感覚的影像は漠然性へと向う傾向を持つてゐることをフォグルは指摘しているが、光も音響も漠然とした一つの感情に溶けて終うことはシエリの最も顕著な特質であり、*fragrance, sound, light, splendour, hue* のような概括的、一般的名称が非常に多く使われていることも、シエリの特徴を示すものと云われている。またこれらの言葉の頻出度数は Ellis の *A Lexical Concordance to the Poetical Works of Percy Bysshe Shelley* に明瞭に示されている。

六、抽象概念に対するシエリの態度

シエリには自由とか愛とかの抽象概念が見られるが、然もそのような抽象概念は擬人化され、人格化されている。シエリのこの傾向は彼の天賦の才の二重性に懸つてゐるが、その二重性とは自由な詩的空想の傾向

と、抽象的、思索的、或は概念的、哲學的傾向とである。シエリ夫人は「イスラムの叛乱」へのノートにおいて、シエリの二つの顯著な知性の特性を挙げてゐる。即ち、輝かしい想像力と、理性の論理的正確さである。彼のこの傾向は彼を詩に導くと同時に、形而上學的論議へ導いたという。⁽⁸⁵⁾それ故、シエリの多くの詩の内容も著しく抽象的である。このようにシエリは彼の世界を觀照する際に、具體的な、現世的な現象の背後に横たわる一般的、普遍的な力、即ち永続的な原理と思想を把握しようと試みた。シエリはこの永久不変なものを、変り易い、信頼し難い現象世界に対立させたのである。

抽象するということはシエリにとつては全く自然なことであつた。グレイボーの云うようにシエリは彼の精妙な哲學を詩において表現することの出来る思想家であつた。⁽⁸⁶⁾シエリの用いる抽象が非常に生き生きしていることは、この事実からも理解されるであらう。シエリはいわば抽象概念を身をもつて考えることの出来る詩人である。たとえば「プリンス・アサネイズ」においても、愛という抽象概念に呼びかけるシエリの調子には特有の響がある。

Thou art the wine whose drunkenness is all
We can desire, O Love!

(Prince Athanase, II, 279—80)

シエリはこの詩において愛を輝きとして、また青い空を充す空氣として考へてゐるが、シエリにあつては愛とか自由という抽象概念が雲や光や風のような自然現象といたに深い親近性を持つてゐるかが了解されるであらう。また「ヘラス」(Hellas)にちかづく「A seraph-winged Victory」(I, 447) という表現が見られるし、また「ユーゲイニアの丘にて詠める詩」には「thought-winged Liberty」(I, 207) という表現が見られる。このように抽象概念を具體的なものにたとえて生き生きと表現することはシエリの大きな特徴の一つである。「ヘラス」にもこのような

抽象概念の擬人化が多く見られるが、「freedom」という概念の擬人化は特に「ヘラス」に多いことが知られる。⁽⁸⁷⁾即ち「自由」は単に生き生きした価値であるというばかりでなく、表現し得る影像としてシエリには感じられた。ここでは自由は輝きとして、また精神的な照明をする太陽として描かれてゐる。

From the West swift Freedom came,

Against the course of Heaven and doom,

A second sun arrayed in flame,

To burn, to kindle, to illumine.

(Hellas, II, 66—69)

ここに歌われている自由の思想はシエリの愛の思想と共に最も生き生きした思想である。シエリの愛と自由とは單なる概念や記号ではなくて、いわば世界を動かす力である。人間はその力によつて觸発され、把握される。シエリは熱情をもつてこの偉大な人類の思想を伝えようとしたのだが、この点においてシエリは自己を人類の使徒、予言者と感じたのである。ハーバート・リードによれば今日では詩人は文明を放擲することによつて、即ち隱遁生活か人住まぬ島に退くことによつて、思索の環境を獲得することが出来るという。このような見方からすればシエリのこの情熱は現代の我々には親しみ難いものであるかも知れない。然しこのことについて我々は現代の詩人の立場を主張する前に、シエリは始めから自己の魂の祕密を語る個人主義的な詩人以上のものであらうと欲したということを考えなければならぬ。「西風の賦」に表現されてゐるように、シエリの詩はいわば呼び覚ます警鐘でなければならなかつた。シエリの詩は偉大な思想を掘めるための手段でなければならなかつた。シエリがこの課題に奉仕しようとした情熱的な誠實さは理解されなければならぬ。そのときシエリの呼びかける抽象概念は決して單なる固定した概念ではなく、生き生きした力を持つた思想であることが知られる

であらう。ハーバート・リードが云つてゐるように「プロミシー・シェリス・アンバウンド」はシェリによれば抒情詩的劇と呼ばれてゐるが、實際は叙事詩であつて、知的な光、及び精神的自由を求める人類の希望の最大の表現である。然もその自由は愛によつて達成されることはグレイボーその他、多くの批評家達の等しく指摘するところである。⁽⁶⁾

七、結 論

最後にシェリの特性について約言するならば、シェリにとつて地上の現実はいわば欺瞞的なものであつた。何故なら地上の現実はずれ交替し、純粹にして單純な形体は、地上にある偶然的なものや過剰なもの、錯綜してゐるものによつて混濁させられる。純粹な、明瞭な、永続的な事物はこの地上の世界では見られない。それは地上の世界と異つた、より高い世界において見出される。シェリの詩においては人間世界は自然の世界に對立し、また自然の世界の背後に後退して終うように見える。同様に具體的なもの、個々のもの、特殊なものは、一般的なもの、理想的なもの、普遍的なものの背後に後退して終う。具體的な影像が前面に押し出されることがあるとしても、それはより一般的な、普遍的なものに關係を持つてゐることが多いようである。この普遍的、理想的なものはシェリを地上から高い世界へ連れて行く。その高い国こそ、シェリの理想の世界であつて、普遍的な思想が純粹な形で示されてゐる。

然しシェリの理想世界は、古代的、造型的な神話の世界と比べて恣意的なところが見られることは否定出来ない。シェリの流動し溶解する影像は古代的というよりは現代的と云い得るであらう。シェリの世界は、造型的な世界と比較して、より自由な世界が感じられるが、然し一方、より大きな動搖も感じられる。キーツと對比されるのもこの点である。シェリの理想世界は古代における人間像や、形体的なものから出てゐるのではなく、むしろ超人間的な力から、即ち、光や風や、響から出て來

たものである。それ故シェリにあつては造型的なものはすべて溶解して終う。たとえば最も古典的精神を體現しているといわれるゲーテの場合は、すべてのものが人間に關係を持ち、造型的であることは周知の事実であるが、シェリにおいては具體的なもの、人間的なものは前面からいかに後退してゐることだらう。我々はそこに古典的詩人と浪漫的詩人との典型的な相違を見出すであらう。シェリにとつては眼に見えない世界がいつも存在してゐるが、この眼に見えない世界がシェリの魂に呼びかけるのである。その広い世界は風や雲のような自然力から、愛や自由のような抽象的なものに至るまで、様々な靈的な力の存在する世界である。この見えないが靈的な力で充された、広い世界こそ、シェリの故郷であつたと云い得るであらう。

註

- (1) The Cambridge History of English Literature, Vol. XI, Herford, C. H., Shelley, p. 69.
- (2) Strong, A. T., Three Studies in Shelley, p. 23.
- (3) Eliot, T. S., The Use of Poetry and the Use of Criticism, p. 89.
- (4) Spurgeon, C. F. E., Mysticism in English Literature, p. 36.
- (5) Fogle, R. H., The Imagery of Keats and Shelley, p. 220.
- (6) Ibid. p. 220.
- (7) Todhunter, J., A Study of Shelley, p. 30.
- (8) Ibid. p. 34.
- (9) Grabo, Carl, The Magic Plant: the Growth of Shelley's Thought, p. 178.
- (10) Strong, A. T., op. cit. p. 22.
- (11) Ibid. pp. 70—79.
- (12) Ibid. p. 71.
- (13) Ibid. p. 69.
- (14) Fogle, R. H., op. cit. pp. 229—30.
- (15) Todhunter, J., op. cit. p. 99.
- (16) Dowden, E., The Life of Percy Bysshe Shelley, p. 317.
- (17) Elton, O., A Survey of English Literature, 1780—1830, Vol. II, p. 190.

- (18) Grabo, C., op. cit. p. 180.
- (19) Beach, J. W., Concept of Nature in 19th-Century English Poetry. p. 243, cited in Joseph Barrell's "Shelley and the Thought of His Time".
- (20) Todhunter, J., op. cit. p. 99.
- (21) Fogle, R. H., op. cit. pp. 220—21.
- (22) Read, H., The True Voice of Feeling. Pt. II, Chapter III, "In Defence of Shelley". p. 284.
- (23) Spurgeon, C. F. E., op. cit. p. 35.
- (24) Grierson, H. J. C. and Smith, J. C., A Critical History of English Poetry. p. 367.
- (25) Elton, O., op. cit. p. 190.
- (26) Fogle, R. H., op. cit. p. 125.
- (27) Todhunter, J., op. cit. p. 53.
- (28) Symons, A., The Romantic Movement in English Poetry. p. 275.
- (29) Fogle, R. H., op. cit. p. 46.
- (30) Ibid. p. 46.
- (31) Symons, A., op. cit. p. 279.
- (32) Bradley, A. C., Shelley's View of Poetry (Oxford Lectures on Poetry). p. 167.
- (33) Elton, O., op. cit. p. 223.
- (34) Fogle, R. H., op. cit. p. 127.
- (35) Grabo, C., op. cit. p. 213.
- (36) Todhunter, J., op. cit. p. 134.
- (37) Strong, A. T., op. cit. p. 49.
- (38) Grabo, C., op. cit. p. 282.
- (39) Fogle, R. H., op. cit. p. 178.
- (40) Ibid. p. 126.
- (41) Ibid. p. 126.
- (42) Ibid. p. 123.
- (43) Grabo, C., op. cit. p. 282.
- (44) Strong, A. T. op. cit. p. 77.
- (45) Ibid. p. 82.
- (46) Ibid. p. 131.
- (47) Strong, A. T. op. cit. p. 95.
- (48) Fogle, R. H., op. cit. p. 95.
- (49) Ibid. p. 138.
- (50) Todhunter, J., op. cit. p. 180.
- (51) Fogle, R. H., op. cit. pp. 51—53.
- (52) Todhunter, J., op. cit. p. 187.
- (53) Ibid. p. 187.
- (54) Leavis, F. R., Revaluation. p. 205.
- (55) Richards, I. A., Principles of Literary Criticism. p. 119.
- (56) Fogle, R. H., op. cit. p. 179.
- (57) Ibid. p. 136.
- (58) The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley; ed. by Thomas Hutchinson. p. 156.
- (59) Grabo, C., op. cit. p. 422.
- (60) Ellis, F. S., A Lexical Concordance to the Poetical Works of Percy Bysshe Shelley. p. 267.
- (61) Read, H., Phases of English Poetry. pp. 135—6.
- (62) Read, H., The True Voice of Feeling. Pt. II, Chapter III, "In Defence of Shelley." p. 271.
- (63) Grabo, C., op. cit. p. 435.